

「東アジアにおける日本哲学研究-国際学会での対話実践参加報告書」

京都大学文学研究科2年 八坂哲弘

東アジアでの文化交渉の諸現象に関して、複眼的視点からの解明を目指す「東アジア文化交渉学会」の第六回年次大会に参加した。我々は「京都哲学と国際化」というパネルテーマのもと、京都学派の哲学が国際化にいかに関与することができるのか、ということに関してそれぞれのパネルメンバーが発表を行った。報告者の発表では、「日本思想史上の西田哲学-西田哲学の日本性」と題して、日本における哲学の持つ独自性とその国際化への可能性についての発表を行った。パネル発表では各国、他分野の研究者が聴講しており、京都哲学に対する多角的な視点からの関心が窺えた。また同様に、海外の研究者から西田哲学と日本思想との関連をめぐっての質問などがあり、海外の研究者からの高い関心を感じた。

直接的に学会に参加したこと以外にも、上海の文化を実地に経験することができたことは有意義であった。例えば、学会の前日に訪れた玉仏寺では日本のお寺との相違が興味深かった。それは、お寺の色使いであったり、拝み方の違いであったり、仏像のつくりの違いであったりである。また、食文化の違いにも驚いた。日本食の特徴というものが、如実に分かる経験であった。

この度、国際学会に実際に参加することによって、より広い視座を持つことができるようになった。研究活動というものは、ともすれば視野の狭いものになりがちである。しかしながら、国際学会に参加し各国の研究者と交流を持つことで、普段は知り得ない海外の研究状況であったり、研究の捉え方であったりというものを知ることが出来た。国際学会への参加経験は、参加前に想定していたよりもはるかに多くの成果を与えてくれた。

以上の様に、今回の国際学会への参加は報告者にとって非常に有意義なものであり、今後もこのような国際学会に積極的に参加したいと考えるようになった。そして、このような有意義な機会を得ることができたのは、KUASU 支援室のご尽力のおかげであり、大変有り難く感じている。また、他の研究者達にもこのような機会を経験して欲しいと思う。とは言え、自費での国際学会への参加というものはなかなか困難なものである。その為、KUASU 支援室の存在意義は大きいと言わざるを得ない。

ところで、より具体的に今回の成果について報告しておきたい。報告者が普段から研究しているテーマは日本哲学史であり、日本的な哲学の特徴や可能性についての研究を行ってきた。今回、国際学会に参加してみて、各国の研究者による申請者とは異なった視点からの日本の哲学の可能性についての知見を、実際の対話において知ることができた。このように、日本の哲学の可能性に対して様々なアプローチがあり得ることを知り、自己の研究に対する客観的な視点を得ることができた。また、国際学会への参加において言語習得の重要性が分かった。少なくとも英語での発表、会話の能力の必要性を感じ、文献読解の為の英語のみでなく、コミュニケーションの為の英語力の必要性を感じた。その為、英会話の学習を行いたいと考えるにいたった。このような動機付けは実際に国際学会に参加していなければ生じなかつたであろう。

以上の様に、今回のプログラムに参加して、他国の研究者との様々な意見交換という経験を得ることができた。これは、日本国内にはおそらく得られなかつたものだろう。同様な機会がこれから多くの学生に開かれてきて欲しいと思う。